

# 関西農業史研究会報

No.18-1980-12-6

木枯らしの吹く本格的な冬となり、今年も残すところあとわずかです。本研究会の月例会も、1977年6月以来、3年半、33回を数えています。1980年は、9回の研究会を行ないました。以下のとおりです。

- (25)2-2 岡 光夫氏 「開拓地における地主の家制度」 (5名)
- (26)3-15 内田和義氏 「近世後期北関東における農民の思想 (7名)  
について—『農家捷徑抄』の分析を中心に—」
- (27)4-26 石田 浩氏 「1930年代華北棉作地帯における農民 (6名)  
層分解—『華北農村の富農階級』の性格に関連して—」
- (28)5-24 堀尾尚志氏 「耕稼春秋—成立、およびその技術の諸相—」 (8名)
- (29)6-28 三橋時雄氏 「近世農業経営規模論の—勘——稲橋五郎(信) (10名)  
の農家論を中心に—」
- (30)7-22 堀尾尚志氏 「千歳報の成立—機軸よりみた考察—」 (9名)  
田中耕司氏 「近世農書にみられる作付順序の地域性」
- (31)9-20 徳永光俊氏 「幕末大和における—農民の生産と生活 (8名)  
—上野の分析(11)—」
- (32)10-18 荒木幹雄氏 「近世の養蚕技術—『養蚕新大成』を以てして—」 (9名)
- (33)12-6 飯沼二郎氏 「近世農書の成立—伴川素庵との比較について—」 ( )

また、今報もNo11(岡報告)、No12(内田報告)、No13(石田報告)、No14(堀尾報告)、No15(三橋報告)、No16(堀尾報告)、No17(徳永報告)、No18(荒木報告)と、8回発行することができました。来年もまた、よろしくお願ひします。

なお、収支決算は次のとおりです。

<収入>		<支出> -1979年分-		-1980年分-	
1979年 会費	9500円	会報ジロ-	6910円	会報ジロ-	7380円
1980年 "	2000円	郵送料	3140円	郵送料	2670円
三橋先生お寄付	20000円	その他	1305円	その他	780円
	<u>31500円</u>		<u>11355円</u>		<u>10830円</u>
					<u>9315円</u>

次に、第32回例会(10月18日)の荒木先生の報告要旨、討論要旨を掲載します。9名の参加でした。

## 第32回例会 荒木幹雄氏 (1980.10.18)

### 「近世の養蚕技術 - 成田重兵衛『蚕飼絹篩大成』を通して -」

<報告要旨>

本報告は、近世の代表的な蚕業書の一つである『蚕飼絹篩大成』を取り上げ、同書にあらわされたところからうかがえる近世の養蚕技術の特徴及び同書の養蚕技術分析方法について検討しようとするものである。

そこでまず、『蚕飼絹篩大成』の方法を検討する視角として、養蚕技術分析方法について考え方を簡単に報告し、あわせて研究史をふり返ることにより、荒木の分析視角の意義づけを行なった。

次いで、『蚕飼絹篩大成』の内容を再構成して、同書に示された栽桑、育蚕過程の特徴を示した。

最後に、以上の検討の結果により、『蚕飼絹篩大成』に示された近世養蚕技術の特徴と『大成』の分析方法について検討した。

なお、『大成』の分析方法については、次のとおり述べた。  
『大成』の蚕糸業分析の特徴は、何よりも蚕糸業の技術について、生産の場で体系的に把握していることにあると言える。すなわち、蚕の生産過程と技術の要素間の量的対応関係の把握（労力—土地—桑—蚕卵—蚕息—繭—蚕座など）が示されている。また、養蚕と他部門（たとえば養蚕と稲作）との結合状況についても、具体的に記述してある。桑園の間作についても述べている。このように農業経営の場で体系的に存続している養蚕技術について総合的に把握し、初めて蚕糸業に取り組む者にとっても蚕糸業がよく把握できるように説明しているのである。

総合的な把握のなかで、技術の構成要素とその使用方法の改善方向をも示している。優秀な用具の選定とその使用方法、作業方法を示しているのである。その方向は、春蚕と夏蚕の二期にわたり集約的に養蚕を発展させる方向である。また、養蚕を阻害する条件に対しても正しく分析している。これらの技術的改善の方向や阻害条件の分析は、いずれも経験に基づき、事実で示している。たとえば蚕種紙の寒晒、苧の使用、濡桑、臭、病虫害などについての記述に示されているとおりである。

また、立地条件などの環境と蚕の生育、技術との関係についても正しい説明を行っている。これらは、いずれも経験に基づき、科学的に判断を下しているのであり、誤った主観的な理論

により、演理的に説明することは全く行ってない。

さらに、経済的な側面の記述も多く行い、技術と経済の両面から蚕糸業を把握し、奨励しているのである。

このように科学的かつ体系的に分析している方法という点からみて『蚕飼綱目大成』は近世の養蚕者として、最も優れたものの一つであったと言えるし、また近世の先進的養蚕技術をも全体的に示している代表例として評価できるのである。(徳永氏)

### 〈討論要旨〉

討論は主に、成田重兵衛の養蚕に対する視角、また野史的な問題をめぐって行なわれた。一つは、その合理的で、実験を重ねる科学的判断の問題である。陰陽道の影響が全くないこと等が強調された。二つめは、農家経営の視点が貫かれていないことである。新しく養蚕を導入しようとした時、田植との競合をいかに解決するか率に成田重兵衛は細かな配慮を払っている。三つめは、殖産興業の思想である。この点は、長次郎の彦根藩の藩専売制や長次の社会経済的背景等を考える必要があるであろうという意見が出された。

次いで、討論は徳永氏が積極的に展開された「養蚕経営の場における養蚕技術の全体的な把握分析」をめぐって、議論が行なわれた。

(徳永記)